

## 選評

上原 真依

### カルロ・クリヴェッリ作《カステル・トロジノー祭壇画》の再構成

上原真依氏の論文は、現在世界各地に分散して所蔵される四点の板絵を、もともとカルロ・クリヴェッリが一四八〇年代後期にカステル・トロジノーのサン・ロレンツォ聖堂のために制作した多翼祭壇画の一部をなすものとして、再構成を行なったものである。

イタリアのゴシック期からルネサンス初期に制作された多翼祭壇画の多くは、十九世紀に解体・売却され、それらの再構成の問題は、この分野における基本的な研究課題となっている。この祭壇画の再構成に関する先行研究は、従来一九六一年のフェデリコ・ゼーリによる論考がほとんど唯一であったが、二〇〇四年に最新のクリヴェッリ作品総目録の著者ロナルド・ライトボーンがゼーリの再構成とは大きく異なる仮説を提案していた。これに対して上原氏は、一八五五年の祭壇画売却申請に関する古文書史料(ローマ国立古文書館所蔵)を新たに発見し、主としてこの史料の記述に基づき、疑問の余地のない結論を導くにいたった。その結果、現存する四点の板絵のグルーピングに関するかぎり、かつてゼーリが様式的観点から推論として提示した考えの正しさが確認され、ライトボーンの新説の誤謬が証明されることになった。一方、祭壇画が当初置かれていた聖堂の同定、および現在失われている頂部と中央部の板絵の主題については、ゼーリの議論の誤りと未解決部分を的確に修正・補完するにいたった。

さらに上原氏は、現存する各板絵に対する綿密な実地調査を実施することによって史料から導かれた結論を補強するとともに、従来あいまいだった二点の聖人像の同定についても詳細な図像学的比較を行ない、史料の情報とあわせて説得力のある結論を導いている。

このように上原氏の論文は、古文書館での史料探索という多大な忍耐を要する作業を通じ、過去の研究が見逃してきた新史料の発見によって、これまで未解決であった問題にほぼ決定的な解決をもたらしたものである。その成果は、美術史研究において一次史料がもつ力を再認識させると同時に、クリヴェッリ後期の制作活動を解明するための確固たる立脚点のひとつを提示した点で、国際的にも有意義な寄与と考えることができる。また、十九世紀イタリアにおける美術品国外流出と市場流通の問題を調査する際のモデルケースとしても、貴重な貢献である。

以上の理由から、上原真依氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称える。